

特集

ヒル・ステーション

アジアの高原リゾートと観光研究の可能性



特集・ヒル・ステーション

立教大学観光学部



特集

02 ヒル・ステーション

アジアの高原リゾートと観光研究の可能性

04 研究対象としての ヒル・ステーション

稲垣 勉 (観光学部)

12 ヒル・ステーションに みられる農業生産

キャメロン・ハイランド (マレーシア)

白坂 蕃 (観光学部)

22 山中に再現される「フランス」

ダラット (ベトナム)

大橋健一 (観光学部)

27 「交流文化」フィールドノート⑥ リトルワールドと人類学的営み

34 中国のヒル・ステーション「廬山」

安島博幸 (観光学部)

40 読書案内 リゾート研究に役立つ知見としての歴史研究 『日本別荘史ノート リゾートの原型』

42 最近の講演会から ブラジルとどう関わるか

根川幸男 (ブラジル大学外国語・翻訳学部日本語科)

45 在外研究通信 03 英国における自然風景美の「発見」

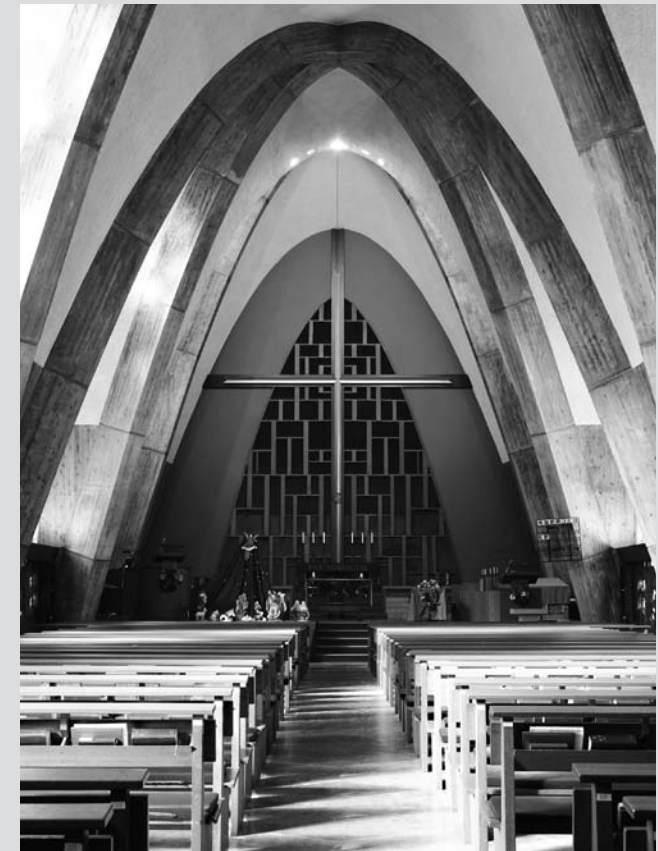
橋本俊哉 (観光学部)



立教大学観光学部

観光学科／交流文化学科

立教大学観光学部は2006年4月、これまでの観光学科に加え、交流文化学科を新設し、2学科体制に移行しました。フィールドを世界に広げ、リアリティに満ちた学びの場を提供するオンリーワンの観光教育を目指します。



立教大学観光学部

〒352-8558

埼玉県新座市北野1-2-26

TEL 048-471-7375

学部の紹介や入学案内については

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/tourism/>

「特集」

ヒル・ステーション

アジアの高原リゾートと観光研究の可能性

東南アジアからアフリカにかけて、西洋の旧植民地の山地部に分布する避暑空間、ヒル・ステーション。そこは非西洋圏における閉ざされたヨーロッパ的景観が形成され、ヨーロッパ的生活文化が再生産される余暇空間であった。その成り立ちと展開を探ることは、観光研究にどのような可能性を切り拓くのか。観光学部に構成されたヒル・ステーション研究グループの取り組みの一部を紹介する。

世界第三の高峰カンチェンジュンガを背景にしたダージリンの町

HILL STATION



研究対象としての ヒル・ステーション

文・写真 稲垣勉 (観光学部)

東南アジアからアフリカにかけて、
西洋の旧植民地の山間部にひろく分布した
避暑空間をヒル・ステーションという。
その誕生当時の役割から今日的な意味まで、
研究対象としての可能性を明らかにする。



ヒ

ル・ステーションとは東南アジアからアフリカまで、旧植民地の山地区部にひろく分布した避暑空間であり、非西欧圏における閉ざされたヨーロッパの景観を形成している。これらヒル・ステーションを対象とする学問的研究の歴史は比較的新しく、また研究の中心もかつてヒル・ステーションを所有した宗主国に集中している。わが国ではヒル・ステーション自体、インド史研究者など一部の例外を除き、大多数の社会科学、人文科学研究者にとって縁遠い存在に過ぎない。

こうした現状にも関わらず、立教大学観光学部にはヒル・ステーションに興味を持つ研究者が数多く在籍しており、ヒル・ステーション研究グループが構成されている。研究グループに属する研究者の学問的背景は様々であり、同時に分析の対象となるヒル・ステーションの諸側面も空間構成、ポストコロニアリティから農業生産に至るまできわめて多様である。ヒル・ステーションはなぜ観光研究者の興味をひきつけ、またどのような研究上の展開を観光研究にもたらずのであろう。本稿ではヒル・ステーションの研究対象としての可能性を、明らかにしていくことにしたい。

ヒル・ステーションとは何か

欧米におけるヒル・ステーション研究の多くは、ヒル・ステーションを定義すること無しに議論を始める。こうした立論がヒル・ステーション研究の主流をなすアングロサクソン諸国の学問的伝統を反映していることは、明らかである。しかし一方で、これらの国の人々が、ヒル・ステーションという言葉から、情緒的な反応を含め、具体的でリアルな空間イメージを想起できることも、定義を必要としない理由のひとつとみなして良い。人々はシムラ (Shimla)、ダーズリン (Darjeeling)、メイミヨー (Meymoo) などの地名から、それらの場所の風光はもちろん、より一般化されたヒル・ステーション固有の景観的特徴や、そこでのライフスタイルを生き生きと心に描くことが出来る。

軽井沢や雲仙をヒル・ステーションとみなす考え方も存在している。しかし独立国であり続けたわが国の避暑地をヒル・ステーションと断定することは難しい。議論を始めるにあたって、当面ここではヒル・ステーションを「宗主国が植民地の山地区に、標高ともなう気候条件の利用を目的として建

設した都市空間」と定義することにしよう。

この定義で最初に確認すべきは、ヒル・ステーションが植民地主義、植民政策の所産であったという点であり、同時に標高1200〜2000米に立地するヒル・ステーションの冷涼で乾燥した気候条件が大きな意味を持つていたという点である。さらに全てのヒル・ステーションはただ一軒のバンガロー、コテージから出発するとはいえず、最終的には都市を志向したという点である。ところでヒル・ステーションは母都市との関係で語られることが多い。デリーとシムラ、カルカッタ (コルカタ) とダーズリン、サイゴン (ホーチミン市) とタラットなど、植民都市の陰面としてヒル・ステーションは存在する。これらの植民都市を補完するために、ヒル・ステーションは、母都市に対応する都市的な機能をとり込まざるを得なかった。

ヒル・ステーションの役割

ヒル・ステーションの淵源は軍事的、地政学的重要性と深く関わっている。ヒル・ステーションの歴史を語る上でエポックメイキングな出来事として知られる一八一九年のシムラの「発見」²⁾も、インドとチベット

1 ヒル・ステーションの中心、教会前広場の雪景色 (シムラ) 2 変身して記念写真におさまるインド人カップル (シムラ) 3 英国風の町並みを残すモール (シムラ) 4 5 発達したヒル・ステーションの中には超狭軌の山岳鉄道でアクセスするところも多い。世界遺産に登録されたダーズリン・ヒマラヤン・レールウェイ、通称トトレイン (ダーズリン) 6 教育はヒル・ステーションの特徴のひとつ。教会付属校に通う女学生 (ダーズリン)



1 ヒル・ステーションの農業は茶栽培ばかりではない。ムナー(インド)のカルダモン・プランテーション。ムナーはタータ(インドの財閥)所有の広大な茶園で知られる 2 記念撮影に興じるインド人団体観光客(ウータカムンド) 3 現在は観光案内所として使われている英国の面影を色濃く残す建物(ヌワラエリヤ) 4-5 英国式クラブがホテルに転身したヒルクラブ。現在も高い格式を誇っている(ヌワラエリヤ)



中国を結ぶ戦略ルート調査の途上のことであつた。またダーズリンも同様である。二〇世紀初頭、清との抗争のなか英国に援助を求めたダライラマ一三世は、ダーズリンや近隣の同じくヒルステーションであるカリンボン(Kalimpong)に一時居を構えてラサ帰還の機会をうかがつていた。また近年ではチベットを脱出したダライラマ一四世が亡命政府を樹立しダラムシャアラ(Daramsal)も、ヒル・ステーションとして知られている。これはこれらのヒルステーションが、ヒマラヤを越えてチベット・中国と対峙する戦略拠点に位置していることを物語っている。

ヒル・ステーションの軍事的な役割は、戦略拠点、交易ルートをおさえることにとどまるものではない。最初の英国インド駐留軍は、わずかの間に過半の人員を病気のために失つたと言われている。宗主国、植民者にとって暑さとの戦いは熾烈を極めた。ヒル・ステーションはその冷涼な気候を利用して、安全かつ減耗なしに部隊を駐屯させる格好の条件を提供した。またこの気候は、療養にも大きな意味を持つ。暑さによる疾病を治療する病院、サナトリウムは、ヒル・ステーションに欠かせない要素である。同時に冷涼な気候を求める植民者達は、自らのバンガローを建てて、沿岸植民都市の酷暑と多湿からの一時的脱出をはかる保養地、避暑地を形成していった。

さらにヒル・ステーションには植民者の子弟を、擬似的に西欧化された環境の下で教育する学校がつくられ、学校教育は現在まで続くヒル・ステーションの伝統のひとつになっていく。一方冷涼な気候は熱帯地方では栽培不能の温帯の蔬菜、花卉栽培を可能にし、茶をはじめとするプランテーションが営まれ、ヒル・ステーション独特の景観が形成される。ダーズリン、スリランカのヌワラエリヤ(Nuwara Eliya)、マレーシアのキャメロン・ハイランド(Cameron Highland)などは現在でも茶の生産中心地として知られている。一部のヒル・ステーションでは酷暑の夏に植民都市から行政機能が移転し、「夏の首都」として機能したところも見られる。夏季、インド副王が滞在しデリーの行政機能が移転したシムラはその典型である。また完成はしなかつたものの、ベトナムのダラットも一時「夏の首都」として機能した。³⁾

ミツエルはヒル・ステーションの形成過程を発展段階的に捉え⁴⁾、段階的に機能が取り入れられて性格が変化していくと論じている。もちろんすべてのヒル・ステーションが同じ成長経路をたどり、「夏の首都」に発展するわけではない。各々のヒル・ステーションが前述の機能を、どのような組み合わせで分有するかは、母都市との関係、ことに母都市からの距離、母都市の規模、性格に関わっており様々である。しかし一旦風景が「発見」され、ヒル・ステーションとしての発展が始まれば、整備される機能の時間的前後関係、組み合わせには一定の法則性を見ることが出来る。

凍れるリゾート空間

きない重要性といえよう。

この研究上の重要性は、観光研究にそくして次の三点にまとめることが出来る。まず第一はリゾート空間の原初的形態を探る手がかりを与えてくれることであり、第二は植民地状況下、余暇空間として文化再生産の場がどのように形成され、何が求められたのかについて新しい視点を与えてくれることである。さらに第三は国民国家成立後、観光あるいは余暇という枠組みを通じて植民地の記憶がどのように新しい国民国家に取り戻されていくかというポストコロニアルな視点の提示である。

まず第一の点について見ていくことにしよう。ヒル・ステーションはたかだか二〇〇年の歴史しか持っていない。第二次世界大戦とともに、宗主国によるヒル・ステーションの建設が終わったことを考えれば、歴史はわずか150年にも満たないと考えても良い。しかもヒル・ステーションのすべてがこの歴史を共有しているわけではない。ことに東南アジアのヒル・ステーションでは開発が始まってから間もなく第二次大戦の混乱期に入り、終焉を迎えたところも少なくない。現在山地民観光の基地として多くの観光客を

集める、ベトナム北部中国国境に近いサパ(ᄣᄞᄞ)もこうしたヒル・ステーションのひとつである。サパが「発見」されてから放棄されるまでの歴史は、わずか10年に満たない。厳密な発展段階とは言いがたいものの、ヒル・ステーションの多くは一定の経路をたどって発展していく。第二次大戦を契機に放棄された時点で、各々のヒル・ステーションではその発展段階にそくした空間構造が固定化され、いわば冷凍保存されているとみなすことができよう。観光研究者にとって、現時点でこうしたリゾートの原初的形態を、目の当たりに出来る場所はそう多くはない。この点、リゾートの空間構造の研究に、ヒル・ステーションはきわめて大きな情報を提供してくれる。

見直されるコロニアリティ

次に第二の点に目を転じよう。植民者と被植民者の関係は明らかに権力関係であり、前者による後者の収奪は紛れもない事実である。しかし植民者達は強者であり続けたわけではない。植民者達は植民地経営の必然から物資の集散地であり、本国との窓口である沿岸植民都市に本拠を置かざるを得ない。しか

置として植民地経営にとつて無くてはならぬ存在であった。これが沿岸植民都市の陰画といわれる所以である。⁵⁾

戦後のヒル・ステーション

第三は第二次大戦以降、現在まで続く状況である。ヒル・ステーションはまぎれもない植民地主義の遺物である。戦後旧植民地が独立して誕生する新しい国民国家にとって、放棄し忘却しても良い存在であった。しかし多くの旧植民地では、現在でもヒル・ステーションはヨーロッパの香りを残す特別な場所として語られている。ベトナムのダラットは新婚旅行のメッカであり、シムラやウータカムンド(Utakamund)などインドのヒル・



チャン州西部のカローはメイミョーと並ぶミャンマーを代表するヒル・ステーションである。ビルマ会社の独自保養施設として建設されたカローホテルは、往時の雰囲気をも今に伝えている



ベトナム北部、中国国境に近いサパは「発見」されてから10年足らずで放棄された若いヒル・ステーションである。その後、中越戦争で破壊されたものの、町のそこそこに植民地時代の面影が残っている

し沿岸植民都市の多くは河口に位置し、暑く同時に多湿であった。沿岸植民都市で西欧的生活を維持することは、きわめて困難であり、時として気候をはじめとする自然条件は、植民者の西欧人としてのアイデンティティを揺るがしかねない脅威となっていく。

ヒル・ステーションは植民地という他者の中に、自らの風景を発見し、それをことさらにヨーロッパ的に作り上げていく行為に他ならない。英国人はインドやビルマのシャン高原、さらにはマレー半島山部に湖水地方のピクチャレスクを発見し、それを山地の都市空間に変容させていく。

ヒル・ステーションでは冷涼な気候を利用して林檎や苺など本国と同じ果実や野菜が生産され、蓄微などの見慣れた花に囲まれた生活を営むことが出来る。同じく冷涼な気候は本国と同じ様式の家屋、服装などを可能にし、植民者達は本国の生活様式を再現し、社交生活が展開される。ヒル・ステーションは一部の自給的な農業生産を除いて、ほぼ完全な消費都市とみなして良い。しかし本国の主としてレジャー生活の再現という文化的再生産を通じて、ヒル・ステーションは植民者のアイデンティティをつなぎ止める安全装

テーションを擁護する言説を巧妙に使い分け、ヒル・ステーションを自らの側に取り戻そうと試みる。ことにヒル・ステーションで始まった学校教育はその後現地の子弟を受け入れ、そこで教育を受けた植民地の人々が独立の過程で大きな役割を果たしたことも、ヒル・ステーションの両面性をさらに際立たせ、言説の使い分けを後押ししている。

ヒル・ステーションは余暇という枠組みで、複雑なポストコロニアリティが発現する典型的な場を形成している。ことに植民地主義の過去から現在未来へと続く時間軸と、その時々状況に促った移民や観光・余暇にともなう一時的な人の流入によって、社会構造が複雑に変化し、様々な文化混濁が生じる場でもある。ヒル・ステーションは世界の縮図として、観光研究のみならず社会科学一般に対しても興味深い研究テーマを提供している。

引用文献

- 1) Spencer, J. E. and W. L. Thomas, "The Hill Stations and the Summer Resorts in the Orient" Geographical Review, 38(4) 1948
- 2) Kanwar, Pamela, Imperial Simla: The Political Culture of the Raj, Oxford University Press, 1999
- 3) Gwendolyn, Wright, The Politics of Design in French Colonial Urbanism, The University of Chicago Press, 1991
- 4) Mitchell, Nora, The Indian Hill—Station, Kodakanal, The University of Chicago, 1972
- 5) 稲垣勉「ポストコロニアル視点からヒル・ステーションの観光」『観光がわかる』朝日新聞社、2002

ヒル・ステーションに みられる農業生産 キャメロン・ハイランド(マレーシア)

文・写真 白坂 蕃 (観光学部)

マレーシアのキャメロン・ハイランドにみられる
温帯蔬菜栽培の特色を分析し、
熱帯アジアにおけるヒル・ステーションの一側面を報告する。

ヒル・ステーションの特徴と農業生産

熱帯や亜熱帯に属する地域には、いわゆる「ヒル・ステーション」とよばれる山地集落が形成されている。とくにアジアの熱帯・亜熱帯に多くの植民地をもっていたイギリス、オランダ、フランスなどの人びとは、高温多湿の気候に順応することが困難であった。そこで彼らは、2〜3年のインターバルで、母国で長期休暇をとることを常とした (Spencer, J and Thomas, W. 1948; Butcher, J. 1979)。

マレーシア半島に進出してきたイギリス人は、そこでの滞在期間の限界を6年としていたが、多くは3〜4年滞在すると長期の休暇をとり、帰国した。しかしながら、彼らは地元の高冷地 (E1) への旅行によって、低地の気候の苦しさから逃れられることを知ることになる。そこには、新しい避暑集落が形成された。

ヒル・ステーションの起源は、19世紀初頭のオランダ領東インドとイギリス領インドに求められる。この新しいタイプの集落は、すぐにアジアのほかの地域、すなわち植民地統治下のあちこちにみられるようになる。

ヒル・ステーションのアイデアは、ヨーロッパの宣教師たちによって生まれた。よく知られていることではあるが、ヒル・ステーションで過ごすという慣例は、直接的にヨーロッパ人に統治されなかった国や地域には発展しなかった。その典型はタイである (Crosscut, 1998)。

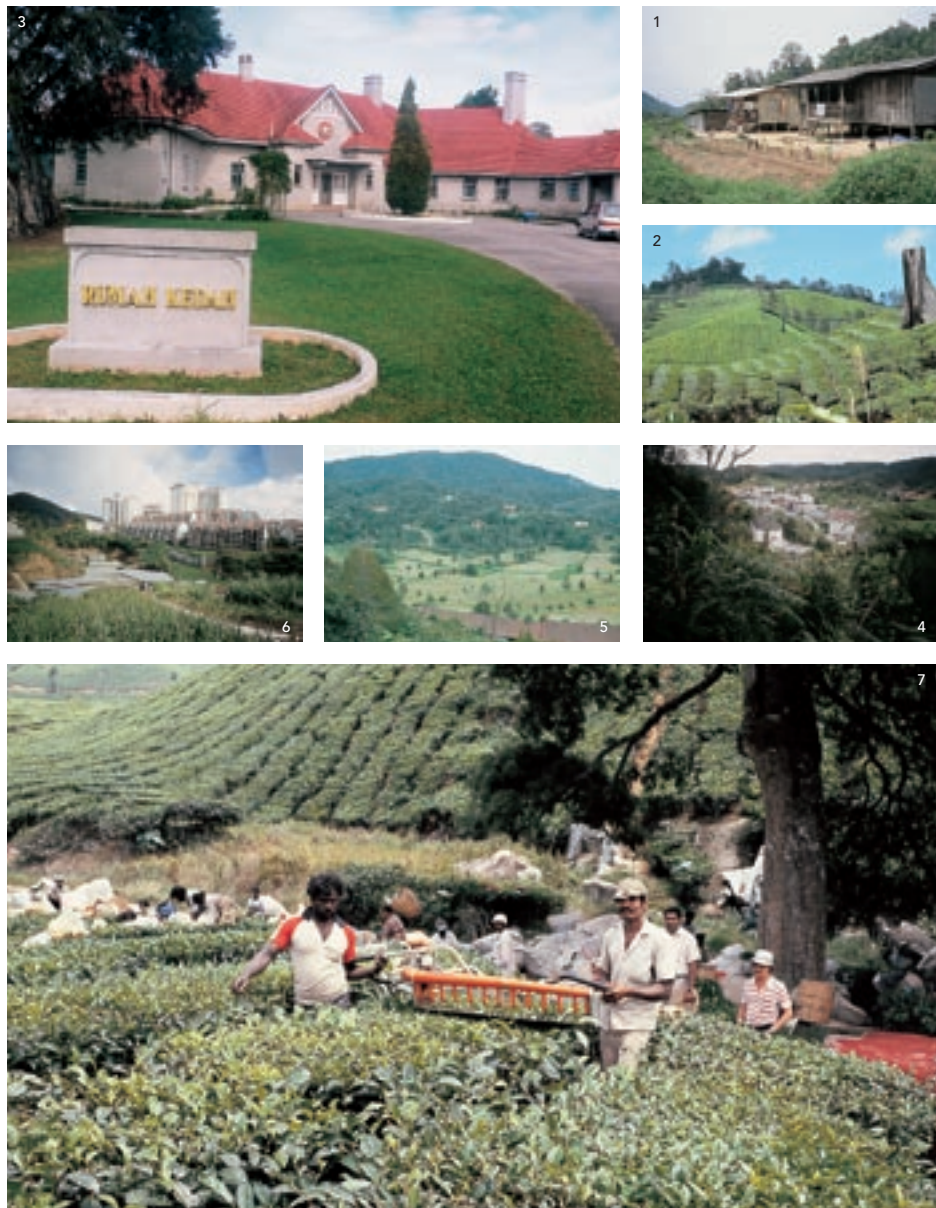
ヒル・ステーション開発の嚆矢は、インドやマレー半島のペナン・ヒル (ペナン島) では1820年代であるが、マレー半島では一般には1880年代である。日本の軽井沢もカナダ人宣教師 A. C. Shaw によって1886年に拓かれた、ヒル・ステーションのひとつといえる。

ヒル・ステーションは、いかなれば基本的にはリゾートである。つまり、ヒル・ステーションというのは、ヨーロッパ人が、楽しみや寛ぎのために、また家族や友人を伴う社交のためにはたまた単なる戯れのためにしばしば訪れる特別な場所としての特徴をもった。

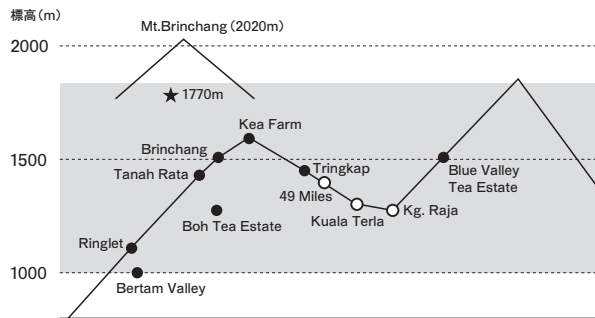
第二次世界大戦後、このようなヒル・ステーションは、多くの場合、その国の国民が定住したり、さらには冷涼な気候を求めて国内から多くの観光客が訪れている場合が多い。しかしながら、ヒル・ステーションには独特の雰囲気がある。

これまでの筆者のインド、マレーシア、インドネシアなどでのフィールドワークの経験から

1 先住民のオラン・アスリの集落。かつては焼畑を営み、ジャングルで移動生活をしてきたオラン・アスリの人びとは、第二次世界大戦以降、政府の援助で住宅をつくり定住するようになった(2001年7月) 2 1937年開園のBoh Tea Estate(茶園)の景観。この茶園(約700ha)は現在でもイギリス資本により経営され、3つの製茶工場をもつ(1985年9月) 3 ケーダー州サルタン(王)のバンガローRumah Kedah。1935年には、こうしたバンガローは50以上存在した(2006年8月) 4 ブリンチャンの集落。ここには仏教寺院に加えて、最近ではヒンドゥー寺院もできた(2001年2月) 5 キャメロン・ハイランドのゴルフ場。ヒル・ステーションはレジャーの場所でもあり、ゴルフ場は必須のアイテムである。周辺の丘には、個人のバンガローが散在する(1985年9月) 6 キャメロン・ハイランドを象徴する景観。Kea FarmにあるEquatorial Hill Resortは1999年にオープンした。チューダー様式のこのホテルの部屋からは蔬菜栽培地が一望できる。写真左下のビニールは、雨除け栽培の耕地である(2001年2月) 7 Boh Tea Estateにおける茶摘み風景。1985年以降は、日本製の茶摘み機が利用されるようになった(1999年3月)



キャメロン・ハイランドの集落の立地と標高



- 第二次世界大戦以前に成立した集落
- 第二次世界大戦後に成立した集落
- ★ 温帯蔬菜栽培の最高地点(1985年9月)

みると、ヒル・ステーションには以下の共通する特徴がある。

- ・列強のアジア進出に伴って形成された集落である。
- ・周辺の低地に比較して、相対的に高地にある。
- ・南アジア、東南アジアにヨーロッパ系の人口の開墾した集落である。

このような特徴をもつヒル・ステーションの機能のなかで、筆者は、とくに農業生産に興味をいだき、フィールドワークをしてきた。

ヒル・ステーションは、初期には長期滞在生活に必要な物資が、山麓の街から供給されていた。しかし、冷涼な気候を利用すれば、低地の熱帯では栽培できない温帯蔬菜(たとえばキャベツ、ハクサイ、トマトなど)が栽培できることに気づくまでに時間はかからなかったものと

- ・ヨーロッパ系の政府の官僚、軍人軍属、商人などが利用した集落である。
- ・ヨーロッパ系の子弟教育のための学校がある(あった)。
- ・初期のバンガローは、蔬菜栽培のプロットをもっていた(マラセ)。
- ・ゴルフ場がある。
- ・測候所がある。
- ・農業試験場がある。
- ・開墾の初期には、低地の基地となる街から生鮮食糧や生活物資の供給をうけた。
- ・茶の栽培がみられる。
- ・花卉栽培がある(あった)。
- ・蔬菜栽培、とくにイチゴの栽培がある(あった)。
- ・酪農がある(あった)。

推測される。

キャメロン・ハイランドの発見と集落の形成

こんにち、この高原における集落の標高は、約1000mのバートム・バレイ(Bartam Valley)がもっとも低く、集落の標高がもっとも高いのはキア・ファーム(Kea Farm)の約1600mである。

この地域は、花崗岩が風化した黄褐色の粘土状の土壌が広く分布し、表層には極くうすく腐食土層が被っている。土壌は決して蔬菜栽培に適しているとはいえないが、その冷涼な気候を利用して、こんにちではマレーシア半島でもっとも重要な蔬菜生産地域となっている。

ところで、この高原は、1885年イギリスの測量技師のひとりであったウイリアム・キャメロン(William Cameron)によって見いだされた。それ以降、この地域は「キャメロン・ハイランド」と呼ばれるようになった。しかしそれ以前この地域が無であったわけではなく、焼畑耕作を営み、狩猟民でもあり、セノイ語を話すオラン・アスリ(Orang Asli)にのみ知られた地域であった。

ペナン島を除くと、マレー半島におけるヒ

キヤメロン・ハイランドに民族別人口 (1945-2000)

年次	計	Malay	Chinese	Indian	Others	Non-Citizens
1947*	8,204	620	4,862	2,194	528	n.a.
1957*	12,126	2,458	5,119	3,401	1,148	n.a.
1970*	16,022	3,163	6,903	5,236	720	n.a.
1980*	21,502	4,559	10,751	5,973	219	n.a.
1984**	24,608	5,823	11,548	6,996	241	n.a.
1991*	25,555	7,275	10,571	6,800	181	728
2000*	30,495	10,565	11,879	5,209	68	2,774

注) Orang Asli は Malay 系に含まれる。Non-Citizensとは外国人労働者である。

データ: * Population and Housing Census of Malaysia

** District Office of the Cameron Highlands

ル・ステーションの嚆矢は、半島の北部のマックスウェル・ヒル (Maxwell Hill) で、ここには1884年に最初のバンガローが建設された。当時のマックスウェル・ヒルは、インドのシムラ (Simla)、ウータカムンド (Utakamund)、コダイカナル (Kodaikanal) などとならんでアジアではもっともよく知られたヒル・ステーションであった。

1890年代に入り、マラヤでは、とくに



イギリス人の居住者が増加し、ヒル・ステーション開発の要求が増大した。マレー半島ですでに開発されたいいくつかのヒル・ステーションは、山頂や山脈の稜線近くに開発されたもので、地形的制約から拡大は不可能であった。またマレー社会に住むイギリス人は、バンガローがあるというだけではなく、農業のできる土地のあるヒル・ステーションの開発を望んだ。この結果、1925年にCameron Highlands Development Committee が設立され、同時に標高1450mのタナ・ラタ (Tanah Rata) に140エーカーの農業試験場 (Federal Agricultural Experimental Station) が開かれた。

1931年までには、山麓のタパ (Tapah) からタナ・ラタまでの道路もでき、さらには茶の栽培も開始され、ホテルも営業を始め、個人のバンガローもみられるようになった。このために、居住者に蔬菜を供給する必要があった。アジアの熱帯・亜熱帯的環境の下では、ヒル・ステーションの発達に伴い、その冷涼な気候を利用した温帯蔬菜の栽培が、徐々に盛んになった。キヤメロン・ハイランドでは、イギリス人の利用する別荘 (バンガローとよばれた) の使用人の多くは華僑であり、彼らは母国から種子を取り寄せたりして、いち早く蔬菜栽培を始めた。こうして、1930年代に入り、公有地 (この高原はオラン・アスリのテリトリーだったが、現在土地はすべて公有地を借地して、華僑による蔬菜栽培が増加した。

個人のバンガローやホテルでの蔬菜栽培をのぞくと、キヤメロン・ハイランドにおける農業経営を目的とした最初の入植は、バーナム・バレーへのそれであった (Jackson 1968)。1934〜38年の間に200家族以上が入植し開墾して、農業を営むようになった。キヤメロン・ハイランドにある集落のほとんどは第二次世界大戦以前に成立した。戦後に成立した集落は蔬菜栽培地の拡大によるものである。

一方、キヤメロン・ハイランドでは、イギリス人により1935年までに茶園が280ha拓かれ、こんにちでは東南アジアではもともと著名な茶の栽培地となっている。

第二次世界大戦以前、この高原には3つのホテル、50以上の個人のバンガロー、ヨーロッパ系の人びとの子弟のための学校 (ほぼ13歳まで) があり、前述の華僑の家族による小規模な蔬菜栽培が拡大しつつあった。

こんにち、キヤメロン・ハイランドには、タナ・ラタとプリンチャン (Bintang) が大きな集落で、ホテルなどもあり、マレーシアではもっともよ



1 雨除け栽培。ビニールの覆いは強い降雨にたいして効用が大きい。この写真の作物はピーマンであるが、雨除け栽培にすると2カ年間実をつける。しかし露地ではそれが5〜6月しか使えない。ピーマンの間には鶏糞がみえる (2001年7月) 2 ベンチテラスの階段状耕地 (1985年9月) 3 蔬菜の出荷風景。生産した蔬菜は、各農家が自動車道路で待つ運搬業者のトラックまで運ぶ。農家の利用するランド・ローバー車は、軍隊の払い下げで、キヤメロン・ハイランドだけで利用が許可され、ドアーにCHと大書されている (2001年2月) 4 急斜面に拓かれた階段状耕地と集落 (キアファームKea Farm) (2001年2月) 5 大規模に開墾される近年の耕地。最近では大型重機を使い、山地の斜面を大規模に削り取り耕地をつくる (2005年3月) 6 道路沿いで蔬菜や花卉の販売。生産した蔬菜をほとんどこうした店で販売仕切ってしまう農家もある (1999年3月) 7 観光客用のイチゴのもぎ取り販売。かつてはシンガポールにまで販売されたイチゴは、栽培に手間がかかることもあり、現在では出荷用には栽培されないが、水耕栽培で、観光客にもぎ取りさせる (2002年7月)

く知られたリゾートでもある。ホテルの多くは1960年代に営業を始めたが、経営的に成り立つようになったのは1970年代に入ってからである。プリンチンは、1965年に最初のショップハウス形式の建物ができ、街が形成された。これを契機にホテルの営業も始まった。

この高原の開発過程から当然のことではあるが、第二次世界大戦直後の人口構成は、その約60%は華人で、インド系26.7%、マレー系はわずか7.6%にすぎなかった。2000

キヤメロン・ハイランドの作物別耕作面積 (1991-1997)

作物	耕作面積 (ha)			
	1991	1993	1995	1997
蔬菜 ^{*1}	2,343	2,599	2,873	2,492
果物(柑橘類など)	50	89	82	8
香草・スパイスなど	6	26	64	64
自給用イモ類(ウビ、タピオカなど)	0	23		
花卉	381	252	319	378
茶 ^{*2}	n.a.	n.a.	2,626	n.a.

*1 ひとつの圃場で2~3回栽培するので、実面積は、1995年の場合1,054 haであった。

*2 茶の栽培面積は1997以降減少傾向にある。Blue Valleyの茶園が蔬菜栽培に変わったためである。

データ: District Office of Cameron Highlandsの資料により作成

年現在この高原の人口は、華人(39%)、マレー系(35%)、インド系(主としてタミール系17%)の順になっている。インド系の人びとは、植民地時代に鉄道や道路工事、またはゴムのプランテーションのためにマレー半島にやってきた。キヤメロン・ハイランドに入植したのは前者の工事関係の人びとだった。また茶園の労働者のすべてはインド系であるが、一部が茶園を出て、街で商業を営んだり、また蔬菜栽培に従事する人たちもいる。インド系の人口も、1980年代後半から減少している。

気候の特色と蔬菜栽培
キヤメロン・ハイランドの各集落は、標高が1000m以上にあるため、マレーシアでは、きわめて特色のある気候がみられる。年降水量(2545mm)はこの国でもっとも多い地域で、とくに4~5月、10~11月はモンスーンの影響で強い降水があり、蔬菜生産を妨げる。降水日数は年間233日で、マレーシアでもっとも多い地域のひとつである。

これに対して、マレー系は、いわゆるブミブトラ政策のもとで公務員などに優先的に雇用されるため、この高原におけるマレー系人口は急速に増加している。しかしマレー系はほとんど農業に従事していない。

金馬崙農業公会(Cameron Highland Vegetable Growers' Association)の資料(1995年)によれば、キヤメロン・ハイランドには約5000

世帯が住み、そのうち1858戸(37%)が、蔬菜栽培に従事している。また花卉栽培農家は180戸くらいで、この高原の農業人口は50%をこえるものと考えられる。筆者のみるところ、蔬菜栽培の80%は華人で、20%がインド系である。

この高原は山がちであり、蔬菜栽培のために森林に被われていた山地斜面を切り開いて、耕地を造成してきた。蔬菜栽培はプリンチンから北のクアラテラ、カンポンラジャ、ブルーバレー(Blue Valley)へと拡大した。

降水量が多いことは、温帯花卉の栽培はもちろん、トマト、キュウリ、カリフラワーなど

の蔬菜にも病気を発生させる。このため、花卉はすべて雨除け栽培であり、蔬菜も雨除け栽培が有効である。

この高原の多い降水量と高い湿度は、当然蔬菜栽培に影響する。高い湿度という環境は、蔬菜に病気をもたらす。蔬菜の病気をコントロールすることは至難の技であり、わずかな有機栽培農家を除けば、ほとんどの蔬菜栽培農家は、多量の殺菌剤を使用している。

筆者の観察によれば、温帯蔬菜栽培の耕作下限は、約1000mであるが、地元の農民は800mまでは可能であろうと推測している。これをこの地域の植物の垂直分布でみると、低地熱帯雨林(lowland rainforest)と山地熱帯雨林(mountain rainforest)との境界(約750m)とほぼ一致するのは興味深い。



棚田のようなクレソンの栽培。ヨーロッパ原産で湿地を好むクレソンは、栽培には水温が14℃前後の冷たくきれいな水が必要である。丘の上はEquatorial Hill Resortである(2005年3月)



ブルーバレーにおけるタミール系農民によるキウの栽培。ブルーバレーは良質の紅茶を生産する茶園があったが、その多くは蔬菜や花卉の栽培地に転換されている(2001年2月)



外国人(バングラディシュ)労働者による耕作。インドネシア以外の外国人労働者は、マレー語を理解できないので2005年11月からは、マレー語や文化に関する研修が義務付けられた(2001年7月撮影)



階段状の耕地におけるキャベツの収穫。林立する竹の支柱は、トマトの栽培用である(2001年7月)

最近の変容…まともにかえて

キヤメロン・ハイランドの蔬菜栽培は、マレーシア半島では確固たる地位を築いてきた。一方、第二次世界大戦後、キヤメロン・ハイランドの観光的功能は当然のことながらマレーシア化(国民化といってもよい)が進んだ。かつては、シンガポールからのリゾート客がほとんどであったが、こんにちでは、大小70ものホテルがあり、年間40万人(実数・筆者の推定では延べ100万人)もの観光客がおとすれる一大リゾートになっている。

この高原の経済からみれば、観光部門が急速に伸びてきており、農業部門と肩を並べるようになっている。こうしたなかで、2000年代に入り、日本の高齢者の海外における長期滞

在地として、キヤメロン・ハイランドがターゲットのひとつになり、頻繁に日本人高齢者と出会うようになった。そのためのバンガローもある。時代の進行とともに、ヒル・ステーションの機能も多様化してきた。

参考文献

- Aiken, S. R. (1994): *Imperial Bekederes-The Hill Stations of Malaysia*. Oxford University Press, Singapore, 84p.
- Butcher, J. (1979): *The British in Malay, 1880-1941-The social history of a European Community in colonial South-East Asia*. Oxford University Press, Kuala Lumpur, pp.68-166.
- Crossette, B. (1998): *The Great Hill Stations of Asia*. Basic Books, New York, 259p.
- Shirasaka, S. (1988): *The Agricultural Development of Hill Stations in Tropical Asia -A Case Study in the Cameron Highlands, Malaysia-Geographical Review of Japan*. The Association of Japanese Geographers, Vol. 61 (Ser. B), No.2, 1988, pp.192-211.
- Spencer, J. and W. Thomas (1948): *The hill station and summer resorts of the orient*. Geographical Review, 38, pp.637-651.



キャメロン・ハイランドを代表する Smokehouse Hotel。1937年にオープンしたこのホテルは、イングランドのカントリーハウスを彷彿とさせ、典型的なコロニアル・ホテルである（2006年8月）



LANGBIAN PALACE
DALAT (ANNAM)

1926年のル・ランビエール、パレスの雑誌広告には、ロマン様式のホテルと、
また山岳少数民族が描かれていた。(Extreme-Asie Numéros 1-2-3, 1926)

西

欧列強による植民地化の中で建設された都市の中でも、植民者が平地の暑さや湿度を逃れた快適な気候の高原地域に彼らの求める近代生活や都市生活を具現化するために建設したのがヒル・ステーションである。ヒル・ステーションは、特に植民者たちの保養や観光を目的に建設されるが多かったため、山中にありながら近代都市のもつ性格の中でも利便性、サービス、楽しみ、社交といった性格が色濃く、西洋の近代生活や都市生活のエッセンスを凝縮したモデルとしての意味合いをもっていた。社交を中心とした近代都市生活のエッセンスは、ヒル・ステーションにどのような空間として成立していたか、そして、それは今日どのように受け継がれているかをベトナム中部高原のダラットを例として探ってみよう。

植民地都市ダラットの建設

フランスは、1867年にコーチシナ直轄植民地、1884年にはアンナン保護領およびトンキン保護領を成立させ、ベトナムの植民地支配を始め、1887年には、1863年に保護領としたカンボジアを含め仏領インドシナ連邦を成立させた(1893年にはさらにラ

山中に再現される 「フランス」 ダラット(ベトナム)

文・写真 大橋健一(観光学部)

ヒル・ステーションは山中にありながら西洋の近代生活や都市生活のエッセンスを凝縮したモデルとしての意味合いをもっていた。ベトナム・ダラットの事例から探る。



1995年再開業したダラット・パレス・ホテルのロビーは、シャンデリア、暖炉、フランス絵画の複製画などで飾られている

1 1995年再開業したダラット・パレス・ホテル 2 ホテルの庭に置かれたオブジェとしてのシトロエンのクラシックカー 3 ホテルとホテルの前に広がる人口湖はダラット市の中心に位置するよう計画された 4 「オリジナルのコロニアルスタイルの維持」をコンセプトに再デザインされた客室内装



オスを保護領とし、仏領インドシナ連邦に編入した。その過程でダラットを含む中部高原地域に対する経済的、政治的関心を高め、幾度も行なわれた探検の中、1893年、ダラットを含む地域一帯は「発見」された。ダラットの「発見」を踏まえて植民地総督政府は1899年、イギリスがインドでおこなった開発（例えば、シムラーやダージリン）を参照しつつ、ダラットにおけるヒル・ステーションの建設を決定した。その後、1915年に平地部との道路が整備されると、いよいよ開発は本格化し、多くの西洋人の保養客がこの地を訪れるようになる。

1916年に総督府はダラットの本格的な観光開発を決定し、また同時に仏領インドシナ連邦の首都を将来的にこの地に建設するという計画も立案した。仏領インドシナ連邦の首都計画を踏まえて、まず建設に着手した公共施設はホテルであった。

ル・ランビアン・パレスに再現された「フランス」

フランスによるダラット開発のもつ意味とは、平地にはない、植民者にとってすこしやさしい快適な気候の場に、小宇宙としての「フランス」を再現していくものだった。これは、

ダラットというヒル・ステーション自体の性格でもあったが、そこに建設されたホテル空間はその小宇宙の核をなした。しかし、一方で中部高原地域は山地少数民族が生活していた場であり、ダラットは単にフランス本国の小宇宙が再現された場のみならず、植民者のエキゾチズムをくすぐる「未開世界との出会いの最前線」でもあり、両義的な空間として成立していた。

1922年のホテル「ル・ランビアン・パレス」開業時の客室数は38室で、フランス料理を出すレストランをはじめ、オーケストラを用意したり、併設の農園ではフランスから持ち込んだ品種の野菜や果物を栽培するなど贅をつくしたものであった。また、テニスコートやダンスホール、乗馬施設が用意され、定期的な映画を上映したり、ジャズコンサートも開催された。ホテルの建築意匠には、当時のフランスの地中海沿岸のリゾートで多くみられたようなロココ様式が採用された。ベトナムの山中にありながら「ここでは「フランス」を再現することが意図され、当時の第一級の建築、設備、サービス、食事が用意された。

当時、ホテルが出していた宣伝広告に描かれた山地少数民族というモチーフに見受けられる。当時のダラットを訪れる旅行者の目的にはジャングルでのハンティングがあり、山地少数民族はそのガイドとして重要な役割を果たしていた。

再び「再現」される「フランス」

1986年、ベトナムはドイモイ政策（刷新政策・対外経済開放政策）を始め、社会主義国でありながら現実的な経済経営を導入する。そ

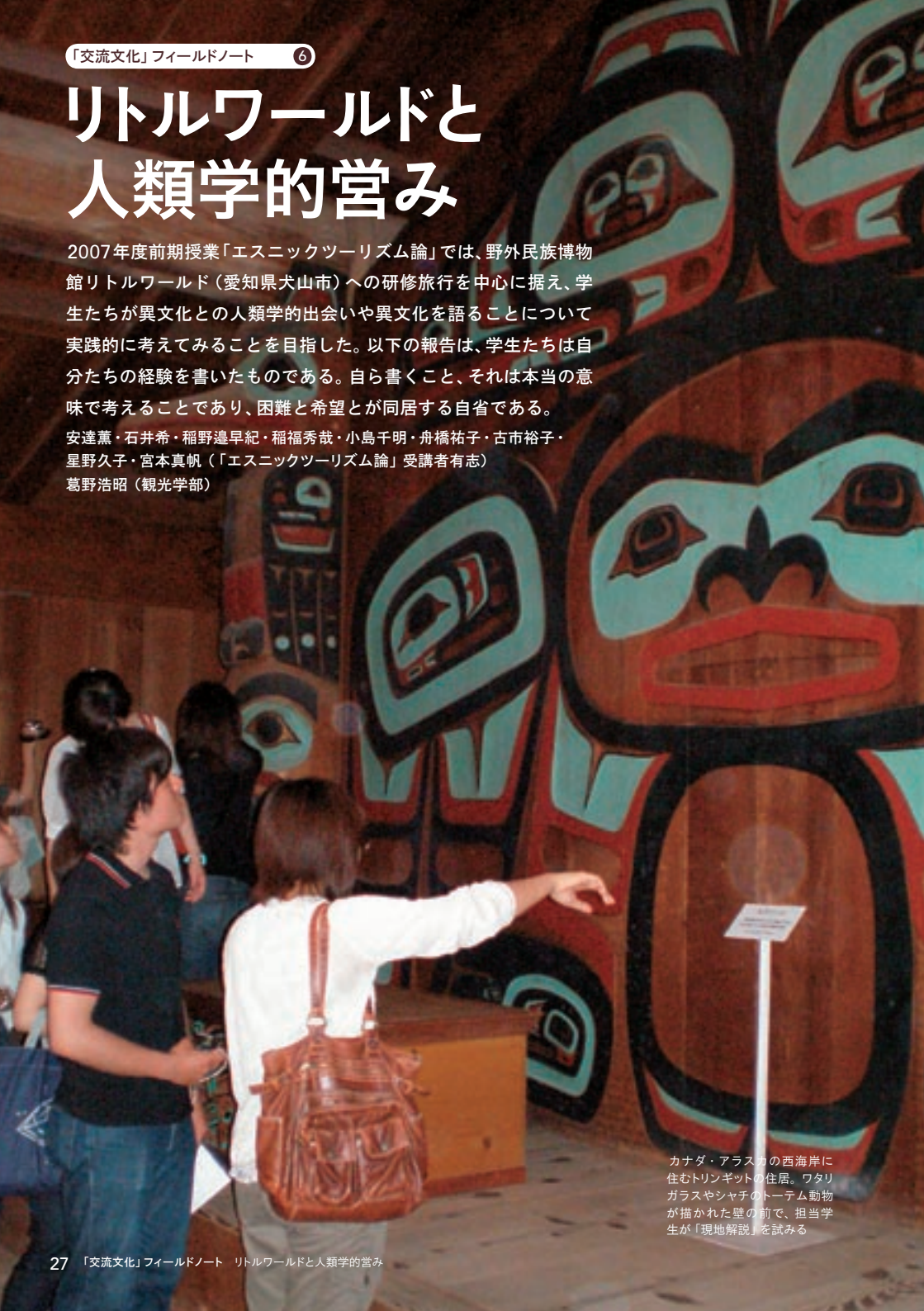
開業時には植民地政権の威信をかけた豪華さを誇ったホテルではあったが、1928年から仏領インドシナの重要な産品であるゴムの価格が世界市場で下落し、世界恐慌を迎える中で、次第に経営難に陥っていった。開業当時を誇った豪華さや壮大さも次第に、植民地政権内で財政的な浪費として捉えられるようになり、以後は細々と経営することになった。

1958年、ホテルは名前を「ダラット・パレス・ホテル」と変え、経営もフランス人からベトナム人へと移った。そして、1975年のベトナム南北統一によりダラットは社会主義国の一部となったが、その後もホテルの営業は継続した。

リトルワールドと人類学的営み

2007年度前期授業「エスニックツーリズム論」では、野外民族博物館リトルワールド（愛知県犬山市）への研修旅行を中心に据え、学生たちが異文化との人類学的出会いや異文化を語ることに実践的に考えてみることを目指した。以下の報告は、学生たちは自分たちの経験を書いたものである。自ら書くこと、それは本当の意味で考えることであり、困難と希望とが同居する自省である。

安達薫・石井希・稲野邊早紀・稲福秀哉・小島千明・舟橋祐子・古市裕子・星野久子・宮本真帆（「エスニックツーリズム論」受講者有志）
葛野浩昭（観光学部）



カナダ・アラスカの西海岸に住むトリンギットの住居。ワタリガラスやシャチのトーテム動物が描かれた壁の前で、担当学生が「現地解説」を試みる

の新たな経済環境の中で観光は重要な意味合いを持つようになった。1990年、それまで細々と経営を続けてきたホテルに対して、アメリカのある実業家が興味をもった。当時はアメリカからの直接投資がでなかったため、香港の投資会社を使い、現地の観光開発業者と合弁会社を設立し、間接的な投資が行なわれた。1991年から改修がおこなわれ、1995年には「ホテル・ソフィテル・ダラット・パレス」として再開業した。ベトナム政府観光局は、このホテルを5つ星ホテルに指定した。改修のコンセプトは、「オリジナルのコロナール・スタイルの維持」であった。発注を受けた香港のインテリアデザイン会社は、コロナール・イメージに基づいて新たに内装をデザインした。興味深いのは蛇口やドアノブなどもすべてアンティーク仕上げがされた新品であり、パブリックスペースの絵画や彫刻は、すべて複製となっていることである。宿泊客の多くは、外国人観光客であり、その多くはアメリカ人、日本人などで、ホテルは必ずしもフランス人



ホテルを背景に記念写真を撮るベトナム人新婚旅行者

に向けて作られているわけではない。しかし、日本のある雑誌がそのベトナム観光特集の記事において同ホテルを「仏領インドシナの名残をもっとも残している街」であるダラットにおける「コロナール風の外観と近代ヨーロッパ風の内装にフランス植民地支配の名残を感じさせるホテル」（『エスカーティア』2000年7月号）と紹介していることは、むしろ、ここに再現された「フランス」が現代の観光という回路を通じてグローバルな文脈に置かれていることを示している。

さらに興味深いのは、ベトナム人観光客の存在である。ホテルの庭にはシトロエンのクラシックカーがオブジェとして置かれ、ベトナム人観光客がこの車を背景にした記念写真の撮影をさかんにこなっている。ベトナムの国内観光市場においてダラットはベトナム人の新婚旅行者に人気の観光地となっている。ダラットに再現された「フランス」が喚起するロマンティックなイ

メージは、依然として大きな訴求力を誇っており、ホテルを訪れるベトナム人新婚旅行者たちは、ホテルの建物を背景に記念写真を撮ることでここに再現された「フランス」を消費している。ホテル側は一時期、新婚旅行者の記念写真撮影用に客室を時間貸しするというサービスまで行なっていた。

意味空間としてのダラット

ここに見たダラットに建設されたホテルの変遷は、ダラットというヒル・ステーションが単なる保養地を超えた特別な意味をもつ場所であることを象徴的に物語っている。

1922年の開業時、それは、仏領インドシナ連邦の盟主としての「フランス」を体現するものとしての意味が込められた場所として機能していた。そして、1986年のドイモイ政策導入以降のベトナムをめぐる新たな政治経済的環境の中で生まれたより重層的な文脈において、そこでは「フランス」が新たに再現され、消費されている。

ヒル・ステーションは、気候条件のもつ特殊性もさることながら、何よりもそのような社会文化的文脈において特別な意味の込められた空間であるといえよう。

エスニックツーリズム再考

異文化との出会いへの自省について

葛野浩昭（観光学部）

人類学的フィールドワークとエスニックツーリズム。文明の中心地域よりも周縁地域に暮らす人びとの方に注目することが多いという点で、両者は似ている。が、違うところもある。

授業「エスニックツーリズム論」は、学生たちが人類学の博物館であるリトルワールドへ出かけ、異文化との人類学的出会いについて自省的に考えてみることを目標としていた。それは間接的な遠回りではあるものの、エスニックツーリズム再考の方向を想像するために有効な作業だと私は考えている。

フィールドワークとエスニックツーリズム

フィールドワークとは、単身で現地に1〜2年間の居候を続け、その地の言葉を使い、人びととの関係性から社会・文化を観察し考察する作業である。しかし、そのためには既存の民族誌資料をできるかぎり読み込み、学術的議論の経緯や展望について理解しておく必要がある。現地へ出かけさえすれば、誰にでも何から何まで「見える」わけではない。現実のフィールドは、その人の知識や洞察力、人びととの間に築き上げた関係に見合った分しか姿を見せてはくれない。

これと比べると、エスニックツーリズムやテレビの異文化紹

介番組には、いつ、どんな観光客やレポーターが訪れても、「その地らしい文化」「もの珍しい異文化」ばかりが分かりやすく用意されるという特徴がある。しかし、それは時代や文脈、関係性からは切り離されて、固定されたものになりやすい。

教室で異文化を語り、現地で自分の眼力を確かめる

リトルワールドには、フィールドワークという作業に真摯にしがみついている人類学者たちが、世界70カ国から収集してきた民族文化資料が展示され、野外展示では22カ国から33もの住居施設が移築・復元されている。それは現地そのものではないが、人類学研究を通して復元された現地ではある。

学生たちは、まずは教室授業で、これら33の住居施設から一つを選び、民族誌資料をまとめたレジュメやビデオ映像等も用いながら人びとの社会や文化について発表した。これは、後に現地を「見る」ために必要となる最低限の準備作業である。

6月17日にはリトルワールドを訪れ、本館展示や野外展示を見学し、教室授業で各自が発表した住居施設を目の前にして再び解説を試みた。これは、自分がどれほど現地を「見る」こと、語ることができるか、自分の眼の力を疑い確かめる作業とも言

える。さらに学生たちは、館長を務める人類学者・大貫良夫先生へのインタヴューもお願いした。

書くことの自省が持つ困難と希望

さて、以下に続く誌面の文章は、すべて学生たちが書いてくれた。そもそも人類学の研究とは、**1**民族誌を読む作業、**2**フィールドワークの作業、**3**民族誌を書く作業、を一つのまとまりとして繰り返す営みである。したがって、学生たちは今回、これら人類学的営みの全体を擬似体験していることになる。

ただし、その人類学的営みは、近年、自分がどこに立って、誰へ向けて、誰のために、何を考え伝えようとしているのかをどこまでも考え抜く、きわめて自省的な作業となっており、そ

れは「自省的人類学 [reflexive anthropology]」とも呼ばれている。リトルワールドを通して経験した異文化との人類学的出会いを、自らが書くこと。それは学生たちにとって、「見る」ための眼力の不足に関する大きな挫折感とも言える自省であるかも知れない。しかしそれは、その挫折を乗り越えてゆこうとする、確かな出発の自省でもあると私は信じている。自省とは、困難と、それ故の希望のことである。ある地域の人びとの社会・文化へ向けて自分が持っている眼力に関する、どこまでも終わることのない自省の積み重ね、それこそが現代人類学が持つ可能性や魅力である。そしてそれは、現状では訪れる側でも迎える側でも様々な問題が指摘されているエスニックツーリズムを、将来へと向けて再考してゆく道の1つでもある。

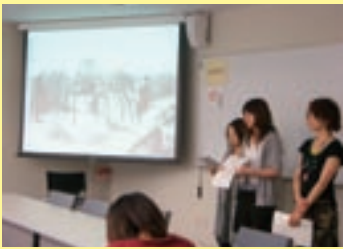
教室発表から現地解説へ

ブッシュマンは、アフリカ南部のカラハリ砂漠に居住してきた民族である。（日本の地理の教科書などではサンと書かれているが、これは隣接民族が用いる強烈な侮蔑の呼称で、ブッシュマンよりも使うべきではないとされている）

伝統的には、数家族のグループで移動しながら、狩猟・採集活動によって食料を得てきた。現在は定住した者が多く、狩猟活動にもイヌ、次いでウマが導入されてきている。息を吸いながら舌打ちするようにして発声するクリック音は、それぞれが5つの声調を持ち、これを母語としない者が習得することはかなり困難と言われる。

教室発表

田中二郎の『砂漠の狩人』『最後の狩猟採集民』など、人類学者が記述した民族誌を資料に基礎的情報を整理し、レジュメにして発表した。また、1981年に公開された映画『ミラクルワールド ブッシュマン』の映像を用い、娯楽映画が表現した「魅力的な原始民族」像についても紹介した。



現地解説の試み

野外展示の難しいブッシュマンとイヌイトの住居だけが、本館の中に並んで復元展示されている。民族誌の本からそのまま出てきたような強烈なリアリティを前にして、私たちは解説作業を忘れてしまうほどだった。ダチョウの卵やヒョウタンを使った水筒や食器に混ざって、アルマイトの食器が砂地の地面に転がっているのは、特別な意図がない限り、わざわざ民族誌は伝えないことである。しかし、そのアルマイト食器もまた、私たちを黙らせてしまった確かなリアリティである。



リトルワールドとは

野外民族博物館リトルワールド（愛知県犬山市）は、123万平方メートルもの広大な敷地で、本館展示と野外展示という二つの方法を用いて、世界の諸民族文化を紹介している。本館では70カ国から集められた6000点もの資料を、進化、技術、言語、社会、価値、の5つのテーマに分けて展示しており（所蔵資料4万点）、猿人から新人へと進化し、技術や道具で環境へ適応し、言語を操り、社会を築き、精神世界に価値を求める、そんな人類への総合的思索を促している。70台ものテレビも設置されており、それぞれのテレビは、世界の様々な民族の生活を伝える映像を4・5本ずつ収めている。野外では、住居を人間の創りだした最大の道具であると位置付け、22カ国から33の住居施設が移築・復元されている。いずれの住居も、中へ入って部屋の様子や生活道具を見ることができる。風土に合わせた建築様式や、社会構造や文化によって異なる生活スタイルを身近で比較しながら、世界の諸民族文化の多様性へと分け入ってゆくことを促している。

<http://www.littleworld.jp>



カッセーナ （西アフリカのブルキナファソ）

塀に囲まれた区域の中に、一夫多妻制の下、四角形の夫の住居と、ヒョウタン形の妻たちの住居が並ぶ。妻たちの住居は半地下式になっており、真つ暗な内部から小さな入り口を通して見上げた外の景色は、これまで経験したことのない「世界の見え方」だった。妻たちの目には、いったい何が見えているのだろう。



ナヤール（インド西南部）

屋敷には、その家で生まれた母系の関係にある人たちだけが住んでいる。女性の夫は自分が生まれた家に住み続け、そこから妻の元へと通ってくるだけで、父親としての役割は果たさない。女性たちが住む2階への階段は、板が固定されておらず、カタカタと鳴る音で、誰の夫が通ってきたのかが分かるとも言う。ここには核家族が生活集団として存在していない。私たちににとっては衝撃の家族構造である。



モンゴル（中国内蒙古自治区）

モンゴル国からの留学生チンバット・アノンさん（観光学部）は、子供の頃にはゲル（テント。中国ではバオ）に住んでいたことがある。彼女による「自文化」の紹介は、私たちに「異文化」の説明とは、詳しさといった内容の差を超えて、口調にも身振りや姿勢にも、どこか決定的な違いがあるように感じた。



本館展示「社会」

世界各地の成人式儀礼を伝えるビデオに釘付けになった。私たちに目をそむけたくくなるような、あまりに残酷に見える種々の儀礼を、「文化」や「伝統」として尊重すべきか、あるいは、道徳的ではないと批判するのが、文化相対主義、自民族中心主義、普遍主義などの関係をどのように捉えるべきか、具体的に難問を突きつけられた。

リトルワールド現地研修 異文化を語ることの難しさを知る

私たちは移築・復元された世界各地の住居の中で解説を試みたが、異文化を語ることは困難をきわめた。その挫折の自覚をコメントから感じ取ってほしい。



アイヌ（北海道）

中央の炉の周りに皆で座ると、懐かしいような気分になった。しかし、私は囲炉裏のある家に住んだことはない、確認してみると、アイヌの子セの囲炉裏と、日本の伝統的住居の囲炉裏の間（板の間）とは構造が異なる。懐かしさという感情が、実体験とは無関係であるばかりか、とても曖昧な知識で支えられていることに気づいた。このチセは、アイヌ文化の継承者であった故・萱野茂さんが、もはや現実生活では造ることのないものを、民族文化の実践・継承活動として仲間たちと一緒に復元したものである。



トリンギット （カナダ・アラスカの西海岸）

巨大なトーテムポールに刻まれ、壁面いっぱいに描かれたワタリガラスやシャチ等のトーテム動物たちは、いずれもが生き生きとしており、どこかユーモラスでもある。人間と動物とが互いに語り合えるような、そんな精神世界の豊かさが優しく伝わってくる。その豊かさを少しでも自分のものにするためには、やはり神話をしっかりと学ぶことが必要だ。



アジエンダ（大農場）の領主館 （ペルー）

部屋の中には、当時のスペイン系ヨーロッパの文明を象徴するような豪華な家具が並び、カトリックの礼拝室は、キリスト教と現地の世界観とがシンクレティズム（習合）を起こした金色の装飾に溢れていた。領主と、インディオや黒人奴隷の労働者との関係の歴史が、強烈に伝わってきた。



本館展示「エントランスホール」

入館して最初に目に飛び込んでくるもの、それは大きな壁一面にランダムに配置された大量の数の顔写真である。独特な民族衣装を着ている者もいれば、顔に派手なペイントを施した者もいる。地域や民族の枠にとらわれずに並べられたそれら人間の顔、顔は、世界には様々な人がいて様々な生活があるということに、素直に目を向けさせてくれる。



サモア諸島の、壁のない円形住居。海をイメージした大きな池が造られ、その周囲にサンゴ礁やサンゴ石を積み重ねた住居とポリネシア・ヤップ島の住居とポリネシア・ヤップ島の住居が並ぶ。サンゴ石を積んで造った基礎の上の住居に入ると、涼しい風が吹き抜けた。

私たちが受け止めたもの

移 築・復元された住居の中に実際に身を置くと、教室授業での発表へ向けて学んだ知識では到底歯が立たないということを実感した。私たちの発表は、私たちが興味を持ったものごとを中心に調べ、それを組み立てたものに過ぎない。しかし、実際の住居には様々なものが溢れており、その一つひとつが私たちにそれぞれのメッセージを発してくる。それを十分に受け止められない自分に歯がゆさを感じた。

たとえば私たちは、自分の家にあるものなら、それが何のためにあるものなのか、どのように使うものなのか、大体のところは分かる。しかし、生業活動や社会構造、信仰世界の異なる人々の住居に足を踏み入れると、生活用品の一つひとつが、部屋の間取りが、壁の装飾が、と、何から何までが不思議なものに見えてくる。

それにしても思う。人類学者たちのフィールドワークとは、いったい、どんなものなのだろう。もし、道具の一つひとつまで、その作り方から使い方を知らないと、文化や社会について論じられないのだとしたら……。

リトルワールドに展示されている住居は、フィールドワークを通してそれぞれの地域に通じた人類学者たちが選んで移築・復元したものである。今回、私たちは、そんな人類学者たちの仕事の中へ、一歩足を踏み入れただけでも知れない。しかし、その経験を通して、文化や社会を論じることの困難と魅力との両方を感じることができたと思う。

現 地では軒を連ねて集落の景観を形造っている筈の住居も、ここリトルワールドでは単独の建築物になってしまう。しかし、それでも一つひとつの住居は私たちに圧倒する力を持っている。見学の最初に出迎えて下さった学芸員の亀井哲也先生がおっしゃった、「リトルワールドで

は、住居を、人間が作り用いる、大きな道具だと考えています。そこに住んでいる人びとの生活や知恵、すなわち社会と文化が、そこにはぎっしりと詰まっている筈です」という言葉通りである。

一つひとつの住居の佇まいや、その内部の細々とした造りや生活道具に目を凝らしながら、そして同時に、幾つもの住居が何軒も連なって形造られる集落の社会・文化的景観の中に包まれること。そんな現地訪問・現地滞在の旅行をしたいと、あらためて強く感じた。

リトルワールドの本館展示・野外展示を、自分たちで解説を加えながら観察し、その上で、かつてリトルワールドの開館へ向けて実際に世界各地へ出かけ、展示物の収集や住居建築の移築・復元に関わってこられた現・館長の 大貫先生への長時間にわたるインタビューも実現した。

こういった貴重な経験を通して私たちが感じ取ったのは、リトルワールドや大貫先生が目指している、①人類や世界の諸民族文化に関する学術的な人類学博物館としての性格、②観光施設としての性格、の両立という理念である。リトルワールドは、たとえば一つひとつの住居が高度に学術的な裏づけの上に移築・復元された研究・教育施設である。そこには、今や現地でも博物館に収まっている文化財とも呼べるようなものも少なくない。しかし、それら住居は、すべて訪問客（観光客）に自由に開放されている。

振り返って考えた時、私たち自身は、観光と文化との関係を学術的に考えることを目指して設置された観光学部交流文化学科の第一期生である。リトルワールドは、そんな私たちにとって、常に勉強・研究の出発点・参照点になる場所であると思う。

館長インタビュー 人類文化の多様性を 受け止めてほしい

INTERVIEW

住居の展示には、文明の中心からは離れていても、人びとの生活ぶりが具体的に伝わってくる、そして、印象的で見栄えのする建物に住んでいる民族を選びました。リトルワールドへ移築して展示することに関しては、いずれの民族も好意的に協力してくれました。私たち人類学の研究者としては、住居をいったん解体する作業や、ここで組み立て直す作業、あるいは、現地とまったく同じものを復元する作業を、現地の人や建築の専門家とも一緒に経験することで、想像もしていなかった様々なことを学びました。住居に詰め込まれた知恵や技術という、人間の文化が持つ凄みや美しさを感じ取ることができました。ただし、世界各地から日本への輸送や、ここでの建物の配置に関しては、法律の壁やこの地形の問題など、大変な苦労もありました。もちろん、材料によっては、日本の風土での野外展示に持ちこたえられないものもありますから、目に見えないところにも、いろいろと工夫を凝らしています。

建物の内部に関しては、そこで暮らしている人びとが今にも帰ってきそうな、そんな臨場感や生活感、いい意味での「本物」を追求しています。たとえば、ネパールの仏教寺院は現地の職人さんが正確に曼荼羅を再現しており、正式な寺院としての認定も受けています。こういった、そこまでするか、というこだわりは、私たちの研究者魂の表れでもあります。このリトルワールドが、人類の文化的多様性や様々な価値観を、確かなリアリティをもって受け止めてもらい、そのことで、人類の可能性を感じ取ってもらうことを目指しているからです。

最近、この世界ではグローバル化が進んで、人類の文化が一様の方角へと向かっていますし、マネー経済の中へ巻き込まれてもいます。博物館としては、また、観光施設としては、あまり固定したメッセージばかりを発信したいとは考えていません。訪れた人が、それぞれに何かを、自由に感じ取って欲しいと考えています。しかし、ここリトルワールドに立った時には、グローバル化やマネー経済化の意味するものについて、普段とは違った見方ができるかも知れません。

これからの取り組みとしては、まだ不十分な、中東のイスラム圏についての展示も充実させたいと考えています。最近、様々な事情から、イスラム地域には、決して好ましくはない偏見が貼られてしまっています。私たちの展示によって、それを少しでもやわらげたいとも考えています。そのためにも、「博物館観光」としてのリトルワールドを、もっと全国的に有名にしていけないといけません。皆さん、学生さんたちから見た時の、感想やアイデアを、是非とも聞かせて欲しいと思っています。

大貫先生はインタビューに1時間半もの時間を割いて下さった。ここに掲載したのは、私たちが皆様に是非ともお伝えしたい内容を中心に編集したものです



大貫良夫

(おおぬき・よしお)
リトルワールド館長。1937年生まれ。文化人類学者（アンデス先史学専攻）。東京大学名誉教授。東京大学アンデス調査団の団長を長く務める。『黄金郷伝説』（講談社）など著書多数。



廬山は、上海から約600km、長江河畔の九江市または南昌市からアクセスする



ヒル・ステーションが建設された廬山は古くから名勝として、また宗教的な名山として広く知られた場所であった



廬山の山上に19世紀後半から計画的に開発された別荘群。ここだけは、西洋のリゾートを見るようだ

中国のヒル・ステーション「廬山」

文・写真 安島博幸 (観光学部)

欧米諸国の完全な植民地となったわけではない中国にも高原リゾートがある。長江沿岸の上海など租界があった都市を母都市とする「廬山」はその代表例である。ヒル・ステーションとしての廬山の形成過程を報告する。

はじめに

インドや東南アジアにおいて欧米人が開発したヒル・ステーションや、日本の高原にやはり欧米人が開発の先鞭をつけた高原リゾートについては、その存在は広く知られており、調査や研究も様々な角度から行われてきた。しかし、中国本土のヒル・ステーションについては、これまでヒル・ステーションが存在したことへの認識も希薄であり、少数例を除いて調査・研究は多いとは言えない。

それには訳がある。ヒル・ステーションとは、植民地において、宗主国側の白人のための高原避暑地を指すのが一般的だからである。その意味において、欧米諸国の完全な植民地となったわけではない中国の高原に営まれたサマリーリゾートは、上記の定義の上では、ヒル・ステーションとは言いえないからである。

日本でも、軽井沢や箱根、六甲山、雲仙など外国人がその開発に関わった地域は多いが、日本の高原避暑地を「ヒル・ステーション」とは呼ばないのと同じである。ただ、アヘン戦争以降、西欧列強や日本が進出し、不平等条約の締結によって半植民地化が進んだ歴史から見ても、中国にヒル・ステーション的な場所が存在しないことの方が考えにくい。このような観点から、中国の山岳避暑地をスクリーニングしてみると、これまではわが国においては知られていないヒル・ステーションの存在が明らかになった。上海を母都市とする「廬山」はその代表例である。

本レポートでは、ヒル・ステーションとしての廬山の形成過程を中心に報告する。

ヒル・ステーション・廬山の成立前の歴史的状况

1840年のアヘン戦争を契機として、中国の歴史は大きく変わった。イギリスなどの西列強や日本が東南沿海の都市に、租界を開設し始めたからである。第2次アヘン戦争(アロー号事件1856)や日清戦争(1904)で、清朝が敗北するたびに中国の内陸部の大河河畔の都市に租界が増えていった。長江沿岸では、上海、鎮江、南京、九江、武漢、重慶に租界が設置された。

寺、海拔600mのところに別荘を造った。ただし、これらの別荘の建築は大規模なものではなく、個別に行われたものと考えられる。例えば、1885年には、九江の税務署につとめるロシア人が、山麓の寺の土地に別荘を建てた。海拔1100mの地域一帯が避暑型の別荘地として本格的に開発が進むのは、1885年(明治18)にイギリス人の李徳立(中国名/本名Edward Selby Little 1864-1936)によってである。李徳立は、廬山北麓の獅子庵、九峰寺の一帯を視察したが、九江から近い九峰寺あたりに別荘を建てる構想を持っていたが、土地がなかなか借用できなかった。19世紀後半になるまで清朝が条約で認めた九江の開港場しか、外国人は居住できなかったからである。しかし、長江の沿岸は中国でも暑さが厳しいところとして知られており、その夏の暑さに耐えられない西洋人は何とかして避暑地を造ろうと考えた。山麓に別荘を造ることを断念した李徳立は山の上を目指した。山頂部にある牯牛嶺一帯の緩やかな丘陵地帯が気に入り、地元民からこの場所を永久借用して避暑用の別荘を建て始めた。冷涼な空気と霧の多い気候、そして山に木が少なかつたことが遠く離れた故郷の風景に似ていたに違

ヒル・ステーション・廬山の形成

廬山に最初の別荘を造りはじめたのは、フランスの宣教師である。1870年代、廬山の北麓、蓮花洞の海拔100mのところである。しかし、これは海抜から見ると、避暑型の別荘ではなかったと考えられる。その後イギリス人やロシア人の宣教師と商人たちが廬山北麓龍門山の九峰



長江沿岸の租界と設置年

都市	最初の開設年	開設国
上海	1843	イギリス (1843)、アメリカ (1846)、フランス (1849)
鎮江	1861	イギリス (1861)
九江	1861	イギリス (1861)
漢口	1861	イギリス (1861)、フランス (1863)、ロシア (1896)、日本 (1898)
重慶	1901	日本 (1901)

廬山の山上にできた整然と建設された避暑都市の市街地の様子 (1900年頃)
 出典:Tess Johnston and Deke Erh (1995). *Near to Heaven: Western Architecture in China's Old Summer Resorts*. Old China Press.

廬山の計画的開発を主導した李徳立の別荘。
 現在、別荘は荒れ果てた状態にある

廬山の山上にできた整然と建設された避暑都市の市街地の様子 (1900年頃) 出典:Tess Johnston and Deke Erh (1995). *Near to Heaven: Western Architecture in China's Old Summer Resorts*. Old China Press.

廬山の山上にできた整然と建設された避暑都市の市街地の様子 (1900年頃) 出典:Tess Johnston and Deke Erh (1995). *Near to Heaven: Western Architecture in China's Old Summer Resorts*. Old China Press.

廬山の山上にできた整然と建設された避暑都市の市街地の様子 (1900年頃) 出典:Tess Johnston and Deke Erh (1995). *Near to Heaven: Western Architecture in China's Old Summer Resorts*. Old China Press.

廬山の山上にできた整然と建設された避暑都市の市街地の様子 (1900年頃) 出典:Tess Johnston and Deke Erh (1995). *Near to Heaven: Western Architecture in China's Old Summer Resorts*. Old China Press.

おかれた。

廬山がヒル・ステーションとして選定された理由

最も大きな理由は、気温との関係がまず挙げられる。冷房装置がない時代にアジアにやってきた西洋人は暑さに苦しんだ。特に、長江流域の南京、武漢、重慶は中国の三大火炉(籠)と称されるほどの酷熱の地である。火炉になる夏を快適に過ごす場所として、廬山は極めて重要な土地であった。李徳立は『牯牛嶺開僻記』に、「九江の夏は特別に暑い、この暑さをしのぐために、避暑地を探すのは非常に重要である」と述べている。廬山の別荘地は、標高1100から1200mに立地しており、九江より約7度程度低くて過ごしやすかった。

廬山における別荘地開発

廬山における別荘地開発

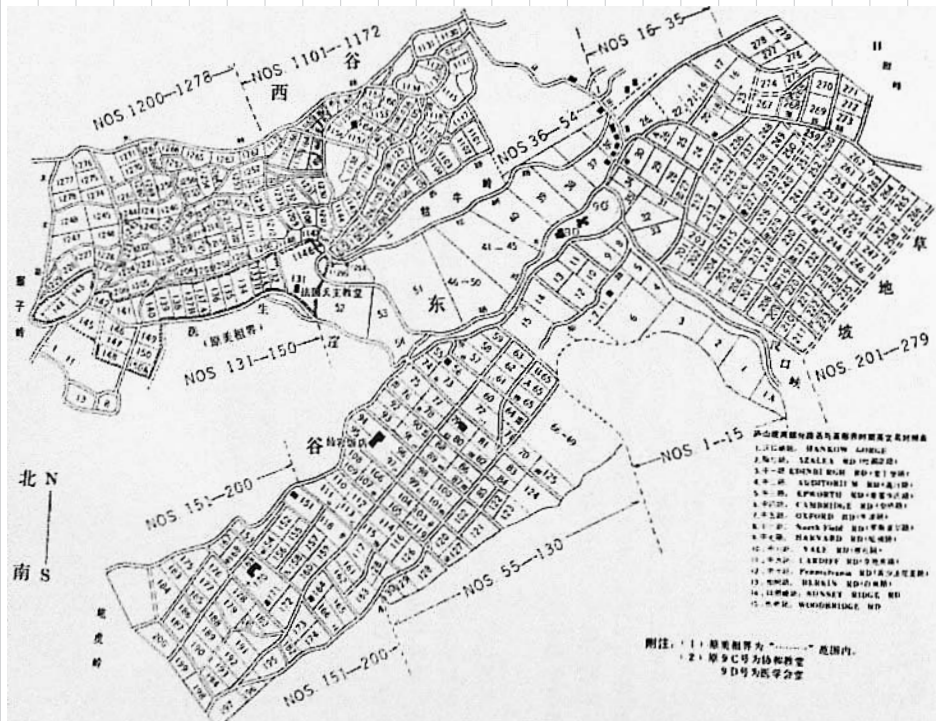
廬山における別荘地開発

い
ない。
しかし、この建物は完成する前に「西洋人嫌い」の地元民によって壊されてしまう。この時、日清戦争で敗れた清政府は外交圧力を受け、廬山一帯を外国人が土地を購入して避暑地とすることを認めた。こうして中国の半植民地化が進む過程において、イギリス人のほかにアメリカ人やロシア人の宣教師、そして商人たちも続々と廬山に別荘を建てるようになった。その後、英、米、仏、独、露などの18カ国の人々が次々に廬山にやってきて、牯牛嶺に別荘を建てるようになった。

ヒル・ステーション・廬山の別荘地としての発展

土地を購入した李徳立は、本格的に別荘地の建設を始めた。まず、牯牛嶺会社を設立し、山麓から山頂への道路を作って、別荘地の建設を計画した。最初購入した4500畝の土地を分譲して上海、武漢などに住む外国人に売り始め、数年のうちに全部を売り切ってしまった。そしてさらに新しい土地を購入する計画を立てた。廬山の避暑地の発展は、1917年8月の調査で別荘560棟、1733人の外国人(うち英国人678人、米国人672人、ドイツ人153人、

日本人28人)が暮らしていた。他に別荘などに住み込みで働く中国人が1126人いた。避暑地に避暑協会が作られ、避暑協会は、別荘所有者から土地税として年25元、家屋税として15元、店舗所有者からは営業税として年5〜10元、別荘所有者からは人頭税として年1元、観光客から通行税として1元を徴収し、道路整備や衛生管理、警察署や図書館の運営経費に充てていた。避暑地に隣接して、外国人相手や中国人観光客向けの商売をする中国人街が生まれ、そこには約2000人が住んでいた。別荘の建設とともに、商店やホテル、病院、学校、教会など商業施設や公共施設も次々と設けられた。1930年の統計で、別荘788棟(うちイギリス租界地域に526棟、ロシア租界地域他に262棟)、店舗86軒がある。店舗などの内訳は、食品・雑貨店23軒、薬局5軒(西洋薬2、漢方薬3)、病院4カ所などである。公共施設は小学校3校、遊楽園1カ所、浴場1カ所、水泳プール5カ所、テニスコート18カ所、映画館1カ所である。最盛期の1937年には、牯牛嶺町の店舗は、260軒を数えた。別荘地全体として、一つの「山中都市」(季四光)が形成されていた。そして、廬山には地域全体を管理する行政機関「廬山管理局」も設立され、江西省政府の直接管理下に



廬山別在地配置計画図。大規模に計画的に都市づくりが行われたことが伺える
 出典: Tess Johnston and Deke Erh (1995). *Near to Heaven: Western Architecture in China's Old Summer Resorts*. Old China Press.



テラスを周囲に配平屋が多い廬山の典型的な石造の別荘建築



石積みの遊歩道



国民党時代に蒋介石と宋美齡が夏を過ごした別荘(美廬別荘)



別荘地内の植栽され修景された分離帯。ロータリーとしても使えるほど余裕を持って作られている

軽井沢における欧米人と日本人の風景の好みの対比によく似ている。

別荘建築は、地域で産出する石材を構造とする石造で、周囲にテラスを巡らせたバンガロー形式(インドのベンガル地方の建築様式で軽井沢の初期別荘も木造で簡素ながら同じ形式)を持つ。それぞれの別荘には、所有者の母国に由来する多少の特徴によって、アメリカ式、イギリス式、オーストリア式、スウェーデン式などの説明があるが、建築学的には、意味がないものだろう。

今後のヒル・ステーション

「廬山」研究の視点

廬山のヒル・ステーションについては、これから本格的に研究を始めるところであるが、いくつか研究の視点について述べておきたいと思う。

まずは、インドあたりから始まったと思われるヒル・ステーションの歴史や形成過程の中で中国のヒル・ステーションを位置づけることが必要な作業だろう。

次に、キリスト教の宣教師が果たした役割を探ってみよう。各宗派の別荘があるが、メソジスト派の宣教師の別荘が目立ったように思われる。18世紀のイギリスで生まれたメソジスト

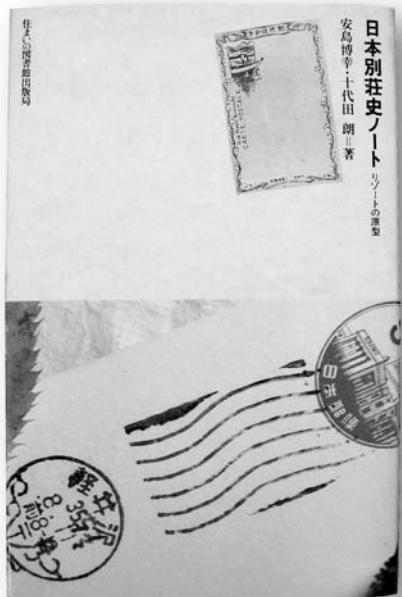
は、本国イギリスではさほど大きな勢力にならなかったが、アイルランド、アメリカ、ドイツなどに早くから普及した。現在アメリカでは信徒数が2番目に多いプロテスタント教団となっている。メソジスト派の特徴としては、日課を区切った厳格な禁欲主義な生活方法(メソッド)を推奨し、これが実践できているかをお互いに報告し合う教会ミーティングを重視したことが挙げられ、教会ミーティングの場として、リゾートとも相性が良かったのではないだろうか。アメリカのリゾートの嚆矢は、1835年にマサチューセッツ州でメソジスト派の信者が夏にキャンプミーティングをしたことに始まると言われていることとも関係がありそうである。

すなわち、李徳立に代表されるインドのヒル・ステーションで経験を積んだイギリスからの流れと、アメリカのキリスト教関係者のサマーキャンプの場所の流れが交錯しているのが「廬山」であることにらんでいるのだが。

読書案内

リゾート計画に
役立つ知見としての
歴史研究

今回は、本号に中国のヒルステーションについて執筆した安島博幸教授(観光学部)の日本の戦前のリゾート史に関する自著を紹介してもらった。



日本別荘史ノーツリゾートの原型

安島博幸・十代田朗 著 住まいの図書館出版局(一九九二) 二二三〇円十税

同じ鉄を使った構造物である橋は名所になるのに、なぜ人は送電線を醜いと感じるのか? そのイメージはどこからくるのか。そもそも美しい風景とは何か。しかもそれは時代によって変わる。そう考えるうち、景観について哲学してみないと気がすまなくなってきた。多くの歴史研究の手がかりは、送電線の研究から得たのです。大学時代から観光地計画を研究していたので、次のテーマは何にしようかと考えたとき、リゾートや別荘に投影された人間の見えな部分を知るためには、歴史研究が必要だと考えました。人はリゾートに何を求めているのか。戦前の日本のリゾートの施設や制度から人間の深い欲望を探りだせないかと考えた。

なかでも重要だと考えたのが、前述した社交空間というリゾートの機能でした。戦前の



安島博幸教授

ブルの生活を試してみたい。通信や電話といった文明の利器が、政財界の要人の集まる別荘地にいち早く導入された。そこは新しい生活や技術を試すのにふさわしい場所だったのです。

リゾートにはみんなが

リゾートにはクラブハウスやテニスコートがありました。そこは社交的でありながら排他的な空間でもあった。いつの時代も人の求めているものはどこか似ています。今日においてもリゾートには人が知り合ったり交流したりするためのクラブのような空間や組織が必要だと思う。そうしないと、長く滞在できないから。ずっと同じ場所にいると飽きちゃうんですね。こうした発想は、今後の日本のリゾート開発を成功させるためにも必要だと思います。リゾート計画に役立つ知見を歴史研究から得るとはこういうことです。

新しい実験場としてのリゾート
1980年代、バブル景気で多くのリゾート施設が開発されましたが、薄っぺらいものばかりが残ったという実感があります。そこにリゾートの哲学がなかったからでしょう。歴史研究から導かれた「社交」というインプリケーションが、計画の中に活かされれば、リゾートの形は違ったものになったかもしれません。

憧れるものがあつた。舶来のものはいまよりずっとまぶしく見えたことでしょう。いまの時代の観光地計画でもその重要性は変わりません。ぼくが大学を卒業したのは1973年のことですが、当時観光地が衰退するなどとは考えられなかった。ところが、その後、多くの観光地の盛衰を見てきた。こうしてみると、観光地も時間軸で見えていかないとわからない。いまだけの流行を追っていると、10年後にはないかもしれない。いまぼくのゼミでも観光地が飽きられず、長続きするためには何が必要かを研究テーマにしていますが、それを考えるうえで、軽井沢がなぜ人気を保っているか、歴史から学ぶことは大切だ。

リゾート開発においても、その地域を長く支えていくものをつくるにはどうしたらいいかを知るには、歴史の価値をどう見るかが問われる。それは人間研究でもあるのです。(2007年7月9日 安島研究室にて)

の本は、ぼくが東京工業大学社会工学科の研究室で1984年以来、取り組んできた「わが国における戦前のリゾートに関する一連の研究」を下敷きに書き下ろしたものです。当時は1987年のリゾート法成立によるリゾートブームが起こり、欧米の先進事例の視察が盛んに行われていました。でも、ぼくはリゾート計画を立てるにあたって、日本のリゾートの原型に立ち返ってみたいが必要だと感じていました。

リゾートは夢の理想郷だった

この本の中で最も書きたかったのは、9章「理想郷としての別荘地」です。現在のリゾートといえば、ビーチでのマリンスポーツや高原でのゴルフ、スキーなどスポーツが中心ですが、戦前の日本の別荘地の歴史をひもといていくと、別の切り口が見えてきます。それは、リゾートにとって社交空間がいかに大事だったかということです。

送電線はなぜ醜いか

工学部出身のぼくが、なぜこうした研究を始めたのか。民間研究機関に勤めていた頃、送電線の景観に与える影響と計画に関する研究をしていました。地域に送電線を計画する際、なるべく人の目に触れないような導線を考えるのですが、どうして送電線は忌み嫌われるのか。それが疑問に思えたのです。

ブラジルとどう関わるか——グローバル時代の日伯関係

2008年は日本からブラジルへの移住が始まって百周年にあたる。最近では、ブラジル日系人が日本に移住する「還流現象」が見られる。ブラジリア大学外国語・翻訳学部の根川幸男助教教授に
両国の新しい関係や異文化とのつきあい方を「講演いただいた。

根川幸男
（ブラジリア大学外国語・翻訳学部日本語学科）

2007年7月2日
立教大学池袋キャンパス
5号館5303教室

皆さんはブラジルという国に対してどのようなイメージをお持ちだろうか。ブラジルというところのような言葉を思い浮かべるだろうか。まずはサッカーかもしれない。たしかに日本ではブラジルはサッカーがさかんで、しかも強いというイメージがあるようだ。ほかにはリオのカーニバルのように、サンバの熱狂的なイメージがあるかもしれない。また、コーヒーの産地としても有名だ。しかし、他にはブラジルのことはあまり知られていないのではないだろうか。ブラジルは日本からは地球の裏側にあり、非常に遠い国である。今日は、そのようなブラジルとわれわれ日本人はどのように関わっていったらよいかという問題を考えてみたいと思う。

2008年はブラジル移住百周年

日本とブラジルの関わりを歴史的に見てみると、日本からブラジルに移住が行われたことからその関係が始まったといっている。今から百年ほど前のことだ。実は来年の2008年は、日本からの移住が始まって100年目の年であり、日本ブラジル交流百周年を記念して各種の行事が行われる予定となっている。

そして最近では、皆さんもよく知っているように、ブラジルからの日系人が日本に移住するという、いわゆる「還流現象」が見られる。外国からの労働者として日系人が認められていることから、多くの人が日本でも働くようになり、地域によってはブラ

ジルからやってきた日系人のコミュニティができていところがある。では、一方そのブラジルでは日本のことをどのように考えているのだろうか。もちろん、多くの日系人が日本へ行って働いていることから、日本は非常に豊かな国だといイメージがある。

そして最近では、ブラジルでは日本の文化が大人気となっている。Jポップと呼ばれる、いわゆる日本のサブカルチャーが若者の間で大人気で、ブラジルで日本に関する催し物をやると、日本のアニメの主人公のコスプレを楽しんだりする人がたくさん集まってくる。そしてそのようなJポップの影響で、大学で日本語を習う人も増えている。

写真 / 根川幸男



サンパウロ東洋街のシンボル大鳥居



2007年2月、サンパウロ東洋街で行なわれた春節行事



サンパウロ東洋街の中心リベルターデ広場



ブラジルの特徴はその人種的・文化的多様性にある。「現代日本社会」の受講生たち



サンパウロのカルナヴァルのディスフィール（パレード）

※「グローバル」とは、グローバルなものとローカルなものが共存している現代の状況を表現している語です。

最近の観光学部講演会

開催日	講演者	演題
2007 4/7	勝俣伸 富士屋ホテル株式会社代表取締役社長	観光・ホスピタリティ産業の魅力および現代的課題
5/21	何国忠 マラヤ大学中国研究所長	「文化中国」の記憶と現実：マレーシア華人と中国、台湾兩岸関係
6/28	クラウディオ・ミンカ ロンドン大学ロイヤルホロウェイ・カレッジ教授	Tourism Planning and Geographers
6/29	クラウディオ・ミンカ ロンドン大学ロイヤルホロウェイ・カレッジ教授	地理学者からみた観光研究
7/2	根川幸男 ブラジル大学外国語・翻訳学部助教授	ブラジルとどう関わるかグローバル時代の日伯関係

異文化を前提に他人とつきあう

このような現象の背景には、異文化を自分たちのものとして受け入れる、ブラジル人の寛容性がある。現在ではその寛容性は、多文化主義として表現されているが、実はこの多文化主義という用語はそれほど歴史が深いものではない。むしろブラジル人は、そのような用語にかかわらず、異文化を持つ人々を伝統的に自分たちのやり方で受け

入れてきたと言えるだろう。異なる文化を持つことを前提に他人とつきあうというやり方が、ブラジルの人の中で広く普及しているのである。

日本が今後さまざまな文化との交流を深めていく中で、このようなブラジルのやり方、つまり異なる文化を異なるものとして尊重しながら、その文化とつきあっていくというやり方が、ひとつの参考になるのではないだろうか。（記録 豊田由貴夫・観光学部）



サンパウロ東洋街の目抜き通りガルヴァン・ブエノ



ブラジルでのコスプレコンテスト参加者。ブラジルでもJ-POPは大人気

在外研究通信 03

United Kingdom

英国における自然風景美の「発見」

橋本俊哉（観光学部）



2006年9月より1年間の在外研究で英国に滞在した橋本教授の報告は、18世紀、湖水地方など自然風景美の発見がもたらした観光行動の変貌に関する考察。

2006年9月より1年間の予定で英国に滞在し、同国の観光行動の実態を、歴史的な観点から追っている。とくに注目している時代は18世紀である。湖水地方や北ウエールズ、ハイランド地方（スコットランド）などは、今でこそ、有名な自然観光地としてひろく知られているが、かつては、英国の人びとにさえ、ほとんど注目されることのない存在であった。それが18世紀後半になると、にわかには脚光をあげ、実際に多くの人びとが訪れる観光目的地へと変貌をとげる。具体的な変貌過程の一端はすでに「参考文献」に記した拙文に

発表している。本稿では、なぜこの時代に、そうした大きな変化が起きたのかを、当時の文化的・思想的な背景とともに紹介することとした。

イタリヤ絵画を模した

英国式「風景庭園」の誕生

かつての英国では、上流階級の子弟たちを国際的に通用する紳士に仕立てあげるために、長期の大陸旅行をさせる習慣があった。「グランド・ツアー」と呼ばれるこの旅行は17世紀後半から18世紀にかけてとくに盛んで、必

ず訪問する目的地は当時の文化的な先進国、フランスやイタリヤであった。フランス貴族の社交術を学び、イタリヤでローマ時代の遺跡やルネッサンス芸術に直接ふれることは、本人にとって貴重な体験であっただけではなく、建築や絵画、ファッションなど、英国の文化にひろく影響を与えることとなった。

自然風景の見方への影響もそのひとつである。18世紀前半まで、古代ローマへのあこがれが強い英国では、イタリヤで活躍する画家たちの描く洗練された田園風景が、風景美の理想であった。そのため、グランド・ツアー

でイタリアを訪れた若様たちは、目利きのふりをしてイタリアの絵画を鑑賞するのみならず、それらを財力に任せて買いあさり、本国へと持ち帰っていた。なかでも人気があったのは、地中海世界の自然を舞台に、古典的な主題を添えた画風で有名なクロード・ジュレ（ロラン）らの作品である。英国のカントリーハウスを訪ねると、その家にゆかりのある肖像画とともに、今もこのような風景画が多く飾られているのは、そのためである。

18世紀に入ると、自らの館にそれらの風景画を飾るだけでなく、自宅の庭を、理想とするクロードらの風景画のように仕立てようとする動きが生まれる。それまでは英国でも、規則性・対称性を基軸とした庭園が主流であった。しかしそれとはまったく異質な、「自然らしさ」を最大特徴とする英国式「風景庭園」の誕生である。実際、その草分けである造園家ウイリアム・ケントは、もとはイタリアで風景画を描いていたところを見出されて帰国した画家であり、彼はまさに絵に描かれた理想の楽園世界を、地上に再現しようとしたのであった。18世紀前半から半ばにかけて、現在でもケントの手がけた造園がほぼ手つかずに残されているラウシャム・パーク

わることになったのもまた、グラランド・ツアーの影響であった。少なくともキリスト教下の中世ヨーロッパにおいて、アルプス山脈は、それまで嫌悪の対象にしかすぎなかった。ところが、人びとが実際にアルプス越えを体験するようになったことで、その偉大さ、崇高さが認識され、明るく輝かしい存在とみなされるようになったのである。これもまた、18世紀に生じた美意識の大転換であった。

こうした時代の流れの中で、英国の代表的な風景庭園のひとつ、ストウを訪れて独自の風景理論の着想をえた青年がいた。湖水地方出身の牧師、ウイリアム・ギルピンである。彼はその後英国内を精力的に旅行し、異国情緒をかきたてる光景ではなく、国内に実在する自然風景や廃墟の美しさに目を向けた。当時英国で流行した美学上の概念を冠して「ピクチャレスク旅行」と称される。この種の旅行は、ギルピンが自らイラストを描いた一連の旅行記を刊行したことで、18世紀末をピークに、英国で大流行したのであった。

ギルピンが最初の旅行記の対象としたのは、南ウェールズのワイ渓谷（ワイ川下流地域）である。この著作は何度も版を重ねる当時のベストセラーとなり、彼の体験した「ワイ川下

- 1 クロード・ロランの風景画の再現（スタウアヘッド）
- 2 風景庭園にとりこまれた神殿（ストウ）
- 3 川をせき止めることで出現した広大な人工池（ブレナム宮殿）
- 4 ワイ川下流地域
- 5 ティンターン僧院



り」は、おおいに賑わいをみせるようになった。とくにギルピンがワイ川下流地域で「もつとも美しく、もつともピクチャレスク」と絶賛したティンターン僧院の廃墟は、芸術家や詩人たちを惹きつける聖地となり、1790年代には、ターナーやワーズワースも繰り返し訪れ、創作活動の糧としている。

18世紀後半といえは、すでに植民地支配で覇権を握った英国が、経済的にも産業革命によって急成長を遂げる最中である。その動き

（オクスフォードシャー）をはじめ、ストウ（バッキンガムシャー）、スタウアヘッド（ウイルトシャー）など、代表的な風景庭園が誕生している。ケントの後継者ランズロット・ブラウンは、規則的な古典式庭園を壊し、興行き感を増す独特の植樹や、時には川をせき止めるような大胆な手法を用いて庭園を改造したことで有名である。その影響はひろく英国内に浸透した。現在、私たちが「イギリス的」と感じる、見晴らしのよいのどかな田園風景の多くは、実はブラウン流に「自然らしさ」を感じさせるように手が加えられたものである。

国内の「絵になる風景」の探勝

18世紀後半になると、イタリア絵画が理想とするような風景に加え、想像力を刺激する険しい地形など「絵にふさわしい」対象を、英国内の実際の風景の中に見出そうとするようになる。ここで、「険しさ」の要素が加

のなかで、自然風景にかんしても、グラランド・ツアーによってもたらされた異国の風景画をモデルとしたものから、自国に実在する自然の魅力に眼が向けられるようになったのであった。

その転換期に青年期を過ごしたワーズワースは、その後ロマン主義に目覚め、英国人の自然観に多大な影響を与えることになる。そして彼が鉄道乗り入れ計画の反対運動を展開した湖水地方は、19世紀末にナショナル・トラスト誕生の舞台となる。こうした時代の流れの中に位置づけると、現在の英国の美しい自然地域での観光の展開を見るうえで、18世紀における美意識の大変革は、決して見過ごすことのできない動きであったといえよう。



参考文献
赤川裕『英国ガーデン物語』研究社出版、1997年
高橋裕子『イギリス美術』岩波新書、1998年
橋本俊哉「英国18世紀後半における自然地域を舞台とした観光の展開過程」『立教大学観光学部紀要』9、2007年

2008年度 立教大学観光研究所 公開講座(予定)

立教大学観光研究所では、以下の2つの
観光産業の入門的公開講座を実施しています。
学生はもちろん、社会人など広く受講者を受け入れています。

旅行業講座

「国内旅行業務取扱管理者試験」
「総合旅行業務取扱管理者試験」
のための準備講座
(2008年4月開講7月修了)

「旅行業講座」は、毎年10月に全国で行われる国家試験「総合旅行業務取扱管理者試験」とそれに先立ち9月に行われる「国内旅行業務取扱管理者試験」のための準備講座です。旅行業界とその業務に関心を持つ人たちが受講しています。旅行業に必要な専門的、かつ実務的な知識を一流の講師陣が、実務経験のない人にもわかりやすく講義します。講義内容では、旅行業法から海外・国内観光資源、旅行実務などの幅広い内容を扱います。

ホスピタリティ・マネジメント講座

宿泊・外食産業の理論と経営、最新動向を学ぶ
(2008年9月末開講12月修了)

ホテル・旅館業・外食産業を中心とするサービス産業は、今日「ホスピタリティ産業」と呼ばれています。「ホスピタリティ・マネジメント講座」では、ホスピタリティ産業の基本理念から、マネジメントの基礎理論、マーケティング、人事、営業企画、法律、最新の業界動向といった幅広い内容まで、業界の第一線の実務家を講師に招いて講義を行います。

問い合わせ

立教大学観光研究所事務局
(池袋キャンパスミツチエル館)

TEL 03-3985-2577 FAX 03-3985-0279
Email: kanken@grp.rikkyo.ne.jp

詳しい講義内容、受講申し込みについては

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/kanken/>



次号予告
2008年4月刊行予定

特集

観光と歴史

交流文化

06

2007年9月30日発行

発行人 稲垣 勉
編集人 大橋健一

デザイン 望月昭秀、仲 麻香
印刷 こだま印刷株式会社

問い合わせ先

立教大学観光学部

〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26

TEL 048-471-7375

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/tourism/>

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

©2007 Rikkyo University, College of Tourism. Printed in Japan.
ISBN 4-9902598-2-3

筆者紹介 (50音順)

稲垣 勉

(いながき・つとむ) 観光学部長

1973年立教大学社会学部観光学科卒業、1976年同大学院社会学研究科修士課程修了。横浜商科大学助教授を経て1987年より本学勤務。1994～95年ヴァージニア工科大学客員教授、2000～01年ハワイ大学客員教授。主著に『観光産業の知識』(共編)、『ホテル産業のリエンジニアリング戦略—環境・コミュニティ・表現・スタイル・場所性—』、Japanese Tourists (共編)など。

大橋健一

(おおはし・けんいち) 観光学部教授

都市人類学・都市社会学専攻。1984年立教大学社会学部社会学科卒業。同大学院社会学研究科博士課程前期課程修了。主要著作に『都市エスニシティの社会学』、『香港社会の人類学』、『アジア都市文化の可能性』、『観光のまなざし』の転回(以上共著)など。

白坂 蕃

(しらすか・しげる) 観光学部教授

1943年中国北京・豊盛胡同生まれ。1969年東京学芸大学大学院修士課程(地理学)修了。理学博士(1980年筑波大学)。東京学芸大学名誉教授。専攻は農山村地理学、観光地理学で、東南アジア(hill stations)、中国(西双版納の焼畑)、アルプスやトランシルバニア(ヒツジの移牧)の地域研究に従事している。主著に『スキーと山地集落』(明玄書房)、『熱帯中国-人と自然-』(共著/古今書院)、『海のくらし』(小峰書店)、『山の世界』(共著/岩波書店)、『林野・草原・水域(アジアの歴史地理 第三巻)』(共著/朝倉書店)、『雲南の焼畑-人類生態学的研究-』(翻訳/農林統計協会)など。

橋本俊哉

(はしもと・としや) 観光学部教授

1985年立教大学社会学部観光学科卒業、同大学院社会学研究科博士前期課程・東京工業大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。工学博士(1994年東京工業大学)。専攻は観光行動学ならびに観光者の視点からの観光計画論。主要著作『観光回遊論』、共著に『観光の社会心理学』、『21世紀の観光学』、『現代観光総論』など。

安島博幸

(やすじま・ひろゆき) 観光学部教授

1973年東京工業大学工学部社会工学科卒業。ラック計画研究所、東京工業大学社会工学科助手、金沢工業大学建築学科教授などを経て、1995年より本学勤務。工学博士。主著に『観光レクリエーション計画論』、『アメニティ都市への途』、『日本別荘史ノート』(以上共著)など。